

会員紹介： 堀内 伸介さん

私の略歴



1958年に国際基督教大学（教養学部）を卒業し、1959年にテキサス大学（テキサス州、オースチン）に留学しました。卒業してからは、アメリカでの教師生活が続きましたが、1966年に国連本部の「工業開発センター」に勤務することになり、これが国際開発の実務に従事するきっかけとなりました。「工業開発センター」は、国際連合工業開発機構（UNIDO）となり、本部がウィーンに設置されることになったため、ウィーンに転勤しました。1973年から2年間、（財）国際開発センターで主任研究員をした後、縁があって外務省で働くことになりました。以来、外交官として国連代表部参事官、技術協力二課長、JICA企画部長、インド公使、南アフリカ総領事、（財）国際開発高等教育機構専務理事への出向を経て、ザンビア大使、ケニア大使を務めて後、外務省を退官しました。退官後は、（株）国際開発アソシエーツの会員・代表を務めました。アフリカとの縁が深まったことから、外務省参与としてTICADに関わり、現在はアフリカ協会理事として、アフリカの開発研究にとりこんでいます。途上国開発（当時後進国開発）を大学の時からテーマにしており、職場は変わりましたが、一貫して途上国開発に関わったことを感謝しております。逆に見れば、井の中の蛙ということでしょうか。

米国留学生活

1959年にテキサス大学（テキサス州、オースチン）に留学しました。テキサス大に行った理由は、唯一奨学金を出してくれたからです。今の若い方には想像もつかないでしょうが、当時は\$1=¥360（闇レートは¥400、外貨持ち出しは\$50までという時代でした。わが国の一人当たりGDPは多分\$200~250の間であったでしょう。現在のアフリカ平均より低い値です！当時のアメリカはキラキラ光っている別天地でした。田舎大学でしたが、所有地から石油が出る豊かな大学でした。生涯であれほど集中して勉強した時期はありません。良い教授にも恵まれました。一生の親友も得ました。1965年に開発問題でPhDをテキサス大からもりました。MAは金融論で61年に取りました。1963年、午後にオースチンの政治集会に来る予定のケネディー大統領がダラスで暗殺されたのは、大ショックでした。まだ、日本軍と戦ったベテランも大学や町にいましたが、不愉快な経験は一つもありませんでした。歯医者さんも太平洋で日本軍と戦った人でしたが、親切でした。寛大で懐の深い良きアメリカでした。

従事した仕事の内容

米国での教師生活 1959－1966：

1964年にアラバマ大学（アラバマ州タスカルーサ）の経済学部講師に採用されました。アメリカ市民が黒人であるが故にアラバマ大学に入学を許されず、州知事が黒人学生

を排除している最中に、外国人である私がフルタイムの教員として採用されたわけです！市民権運動の最盛期でした。美しい南部の町でしたが、黒人差別の深淵をちょっとだけ覗きました。

1965年にシカゴから30マイル離れたデカルブの北イリノイ州立大学の助教授として採用され、経済原論、統計入門、国際経済、アジア経済などを教えておりました。夏は酷暑、冬は極寒の田舎町でした。ベトナム戦争の最中で、徴兵検査を受けさせられました。友人の家族には戦死者も出て、ベトナム戦争の深刻さを実感しました。

国連勤務；NYからウイーンへ 1966—1973

1966年にテキサス大の指導教授であったベンジャミン・ヒギンスの紹介で、NY国連本部の工業開発センターに移りました。事務職員も入れて50人くらいの小さな所帯で部長はハンス・シンガーでした。教職との縁を切らないため、夜はNY市立大学（クイーズ校）で経済原論と国際経済を教えていました。

1967年にこのセンターがUNIDOに昇格し、ウイーンに移りました。驚いたことは、NYの小さな一部局が、研究員の数は変わらず、事務職員、通訳、翻訳官等々が増えて、400人くらいの大組織になっていました。我々研究員は工業開発官というイカメシイ名前をもらい、片隅に追いやられて、小さくなっていました。国連機関が如何に増殖するのかをつぶさに観察しました！

当時のウイーンは現在と全く異なり、夏でも観光客などまばらで、道に人影を見ないような寂れたところでした。戦後の4ヶ国占領が終わったばかりで、ウイーン郊外はソ連の占領下であったために復興もおくれ、建物のシェーン・ブルン・イエローの壁には砲弾の跡も残るところでした。中国料理店が3つしかなかったのです！しかし、オペラ、美術館、スキー、ワインを楽しみました。

工業統計の整備、年報の用意、アラブ連合、東アフリカ共同体担当ということで、初めてアフリカ大陸に足を踏み入れ、カイロ、ナイロビに工業調査センターを作り、一年のうち半年近くは、アフリカに出張しておりました。71年のアミンのクーデターもカンパラで経験しました。「プラハの春」も経験し、共産政権であった東欧諸国の大学、研究所にもしばしば出張し、共産党支配の酷さを目の当たりにしました。当時日本では、共産党政権万歳を知識人、マスコミが叫んでいましたが、彼らの無知と観念論に呆れたものでした。

国際開発センター（IDCJ） 1973—1975

大来先生、ECFAの山口専務のお誘いで、73年に出来たてのIDCJに主任研究員として移りました。1959年から73年まで、外にいたので60年代の日本が私からスッポリ抜けており、日本で働いた経験もなく、日本再発見ということでした。本格的なシンクタンクということでしたが、各省からの調査研究に追われる日々で、私は主に通産省と企画庁の調査を担当し、東南アジアの工業化調査をしていました。大学、学者、官僚、各省の外郭団体との人脈を作ることが出来ました。後のSRIDのメンバーです。

外務省と JICA 1975—1998

経済協力局政策課企画官として入省しました。南北対立華やかな頃で、国際会議と出来たばかりの JICA のプログラムを担当しました。残業、残業を初めて経験しました！

国連代表部参事官 (78—80) : 経済班で南北対話、企業不正防止条約等の交渉を担当。G77 との交渉で国連決議の書き方、合意文書の作成など国際会議での駆け引きを学びました。ということは、各地域グループ内の交渉成立を国連の廊下で延々と明け方まで待つことでした！3 年間もやると、顔をうり、マフィアのように地域グループでの地位が少し上がり、代貸くらいとなり、会議の役付きになり、自国に有利に交渉を進めることが出来るようになります！国際交渉のスキルは現場でもまれて、身に着くと思います。NY で公私交えての友人を多くつくる事が出来ました。暇をみて美術館とブロードウェイを楽しみました。NY の大停電も経験しましたが、私どもには子供はできませんでした！

技術協力第二課長、JICA 企画部長 (80—85) : 仕事の内容が続いていたので、自分の中でも区切りが明確ではありません。「プロジェクト・タイプ技術協力」を担当し、250 件くらいが、on-going で、毎年 20~25 くらいプロジェクトが入れ替わりました。アセアン人造りプロジェクト、国際緊急医療チーム、タイ国境の医療キャンプ、アセアン青年招聘、日中友好病院、キング・モンクット工科大学、セネガルの職業訓練所、国際協力専門員制度等々思い出の深いものも多々あります。技術協力、無償援助を現場で勉強しました。我が国の援助体制についても学び、後の FASID 創立の参考になりました。

在インド大使館公使、ブータン公使 (85—88) : 英国のインド・サービスの流れをくむイン



ド官僚の質の高さとインド人のエネルギーに驚かされました。ガンジーとネルーの政治哲学が浸透した政治、行政組織、経済システムがインド人の可能性を閉じ込めて、世界経済の潮流に乗り遅れていた時です。解放された時はすごいことになると考えておりましたが、両巨人の影響が強く、「その時はすぐには来ない」と判断を誤りました。当時のデリー、ボンベイ、カルカッタのスラムのすごさは想像を絶するものでした。アフリカで多くのスラムを見ましたが、あれほどひどいものは見たことがありません。円借、無償資金協力プロジェクトの増加、日本企業とインド企業の連携の場作りなど、大いに働かせてもらいました。徳仁親王のインド、ブータン御訪問も楽しい思い出です。ブータンは仏教の国で、すべての

交渉は、まず、長い読経とバター茶で始まり、閉口しましたが、今となっては楽しい思い出です。インドのカーストと民族問題、インドの文明の底の深さなど少し学びました。

在南アフリカ総領事 (88—90) : アパルトヘイトの故に外交関係のない南アへの赴任は厳しいものでした。南ア外務省に総領事として挨拶に行くと、事務次官が「日本と外交関係はなく、貴国は経済制裁を行っているし、東京の南ア外交官も差別を受けているので、今後、南ア政府は貴官と一切関わりを持たない。お会いするのも今日が最初で、最後である。」

という初日でした。建前と本音が異なることは当然で、南ア人のディナーに招待されて行くと、大臣や接触したい役人もお客になっていました。反アパルトヘイトで知られていた南ア人に誘われて、2、3日の休暇旅行に行くと、主要国の大使と主要閣僚が一緒ということもあり、当然そこでアパルトヘイト後の体制についての議論が行われました。アパルトヘイトの最後の時期でしたが、治安部隊、警察と黒人デモの衝突は、毎日の出来事で、外交官がデモの先頭に立つと警察もあまり乱暴しないので、若い外交官連中は参加していませんでした。

マンデラさんがすでにロビン島の刑務所から密かにケープタウンに移され、ANCとの対話の用意が進んでいた時です。ANCの勝利は見えていたし、黒人側との接触も増えておりました。公邸で黒人指導者とのディナーをしばしば開きましたが、公安警察から何の邪魔も入らず、スウェート（黒人地地域）でレセプションを開いたこともありました。保守的な日本人ビジネスマンからは、非難されましたが、彼らを説得して黒人商工会議所に入会してもらいました、当時のモツエンヤニ会頭は後に大使など要職を占めた優れた指導者で、一昨年日本政府は海外叙勲を致しました。

当時の日本人会は「二国間の友好を推進する」と規約にあり、総領事館は「推進しない」立場であるので、日本人会から公館が脱会するという前代未聞の時でした！黒人グループは政府ではないので、ODAで支援することが出来ず、いろいろ工夫をしました。アパルトヘイトの最後の時期でしたが、その社会的な影響の深さは、米国南部の経験や南アのボア戦争の影響から判断しても、100年は消えないと思います。「名誉白人」は南アの法律には全く存在しない言葉であり、マスコミの面白半分の創作です。

これから佳境に入るところですが、紙面に制限があり、端折ってすすめます！

FASID (1990-1992) :



2003年、在京アフリカ大使にPCMの説明

2003年、在京アフリカ大使にPCMの説明
出向してもらい、彼が学んできたドイツのGTZのZOPPを基に二人でプロジェクト作成手法を作り、Project Cycle Management (PCM)と名付けました。パテントを取っておくべきでした！JICAの柳谷総裁にお願いし、幹部を集めていただき、プレゼンテーションを行い、その場でJICA採択を決めていただきました。その後、FASIDの優秀な女性達によって広がって行きました。

本省に呼び戻され、経済協力の専門家を育てる大学院大学を創設するので、「お前は事務方として働け」と告げられました。大来先生、経団連、外務省幹部がすでに準備を進めておりました。田中秀雄事務官と小生、米国留学から帰ってきたばかりの元JICA職員の源由理子さん（現在明大教授）のアルバイトでの三人で外務省の北側の小さな準備室が創世記です。

FASIDでは色々仕事をさせてもらいましたが、

PCMを挙げたいとおもいます。SRIDの会員でミャンマーのJICA事務所長から帰国した藤村さんに

ザンビア大使（92—95）ボツワナ、マラウイ兼任：



1995年、ルサカ・ジョージでの水道施工式

選挙でカウンダ大統領から労働組合出身のチルバ大統領に政権が移譲され、民主化の夜明けと期待しましたが、独裁者に変身しました。構造調整政策は貧困層の拡大に寄与？しました。ザンビア着任早々コレラが北の方に発生し、バス路線にそって患者が毎日増えて行きました。最後はルサカの30万～50万の人口を擁するジョージというスラムで、たちまち6千人くらいの患者が発生しました。援助国の協力でどうにか押えましたが、1割以上の死者を出しました。政府は援助国に頼りきりで、その後も感染症の対策を構築しませんでした。援助が医療改革を遅らせる例として、記憶に

残っています。我が国が無償資金協力で大規模な水道を引き、それ以来ジョージの感染症の発生は激減しました。この水道の建設にあたり、スラムの住人と対話を重ねましたが、素晴らしい才能を持った指導者が、スラムに閉じ込められていることを認識させられました。

マラウイはアフリカ最大の青年海外協力隊員が派遣されている国で、田舎で日本の牛舎より見劣りする酷い小屋で一人で頑張っている女性隊員などに感動しました。バンダ大統領の独裁政治、選挙での交代など荒れた政情をつぶさに見ることになりました。国際的な選挙監視の欠点も多く目にしました。余りにもアフリカ社会と政治に無知です。悪知恵に対抗する術を持っていませんでした。ボツワナは他のアフリカ諸国とは異なり、自助の哲学を持ち、ダイヤモンドからの収入も賢く使って、福祉国家を建設していました。当時の大統領の公邸は、普通の大きな家でした。議会も学校の講堂を使って運営していたそうです。その後、不景気の時に景気対策で立派な議会建物を建設したそうです。

ケニア大使（95—98）、ウガンダ、ブルンジ、ルワンダ、セイシェル兼任、国連環境計画、居住機構日本政府代表：



1996年、ナイロビエイズ孤児院に学校寄贈

ルワンダのジェノサイドの直後であり、この支援と和解努力に多くの時間を使いました。まだ、定期便はなく、自衛隊機か、小さなセスナを雇ってキガリに行くありさまでした。パイロットはゴム草履、途中でガス切れとなり、タンザニアの田舎飛行場に降りて、ガスを買うのですが、カードは使えず、乗客から現金を集めることもありました。ケニアではPCMを使い国会議員、官僚と政策づくりをしました。当時与野党の議員は議会の外で一緒にいるところ見られてはならないような緊張関係がありました。しかし、大使館は別で、広報センターを使い、優秀な与野党議員を招き、PCMで政策づくりをしました。3つほど議員立法で（汚職関連）法律にもなりました。97年の大統領選挙は緊迫し、反体制側は、新しい国歌を制定したとの噂も流れるほどで、主要援助国5

ケ国大使は 調停の一端を担いました。一部議員やモイ大統領との関係も悪化しましたが、ケニア政治の裏表をみっちり勉強させてもらいました。



1995 年、パウロ 2 世とナイロビにて

ウガンダは政情不安がありましたが、大使館の出張所をつくり、後に大使館になりました。

ブルンジでは「静かなジェノサイド」が続いていて、2 年間以上、毎日数人が殺されるという凄惨な時でした。セイシェルは社会主義体制から転換を図った時期で、国有化されていたホテルのサービスは酷いものでした。中国人の移民社会があり、優勝な銀行頭取なども出ていました。中国語は全く使えない移民社会でしたが、そのたくましさに強い印象を持ちました。漁業無償で寄贈した調査船に乗せられ、ひどい船酔いをしたことだけ覚えています。

「V」 外務省参与 (TICAD 担当) (98 - 03)、国際問題研究所 客員研究員 (99—04)、国際アソシエツ 社員のち代表 (98—09) :



1999 年アフリカ・アジア・ビジネス・フォーラム

98 年に退官しましたが、参与として TICADIV まで無償で働かされました。9 : 11 事件も、NY での TICAD 準備会合の最中に経験しました。外務省にお礼奉公があるとは知りませんでした！三つの職を兼務し、5 年間、2~3 ヶ月に一度以上アフリカへの出張、体内時計が完全に破壊されました。JICA の開発パートナーから予算を頂き、ケニアの 4 つのスラムの貧困削減プロジェクトを 3 年半実施しました。援助について、目から鱗の経験でした。PCM をスラムの住人に教え、有効な生活設計ができるようになりました。いつか詳しくお話したいプロジェクトです。

アフリカ協会理事 (02 - 現在) : 会員、ボランティア募集中 !

現在アフリカ協会は、アフリカでの活動 (主に NGO 支援、南ア学生への奨学金) よりも、我が国におけるアフリカの理解促進に努力しております。季刊「アフリカ」誌を発行しております。是非購読してください！書評を毎号書いておりますが、良い勉強です。